

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 藤 本 雅 子

本研究は日本語音声に見られる母音の無声化に関わる要因について、音響分析と光電グロトグラム(Photoelectric Glottogram)による喉頭観察の手法を用いて、持続時間制御と喉頭調節の両面から検討したものである。従来、定性的に指摘されてきたように、無声化の発現と子音、母音の長さ及び子音の発音の特徴が関与するか否かにつき、一般的に無声化の多い東京方言(標準語)話者と無声化が少ない大阪方言話者の発話を比較し検証した。その結果以下の知見が得られた。

1. 東京話者は母音が無声化しない大阪話者に比べ、/ki/と/ke/の子音が長く母音が短いこと、子音が長いのは無声子音/k/発音時の声門の開放時間が長いためであることが示された。東京話者の無声化の頻度が多いことには子音の発音が影響していることが示唆された。
2. 東京話者の子音/k/の特徴として大阪話者に比べ気音区間が長いことが明らかになった。また/k/の破裂時点を声門の開大のピークに一致させるような発音が行なわれていた。このことは東京話者の気音を強める傾向をもたらしていると考えられた。
3. 速い発話で母音が無声化した大阪話者は、速い発話でも母音が無声化しない大阪話者に比べ母音が短く、速めの発話では東京話者の母音長と差がなくなることが分かった。このことはこれら的大阪話者が速い発話で無声化したことと対応していると考えられる。ただし、子音長が東京話者と同程度に長い場合でも気音区間は東京話者ほど長くなく、大阪話者は共通の子音の特徴を保っていた。
4. 母音が無声化した東京話者の[k_ite]では、[k_i]のモーラ長が特に短く、声門の開大は第 2 モーラの/t/では顕著でないにも関わらず、無声化していた[k_ite]の

[kɨt]の開大は[kide]の[k]より大きいことが明らかになった。このことは無声化していた[kɨte]の[kɨt]の声門の開大の大きさが[k]と[t]の単純な足しあわせでは説明できないことを示し、無声化環境での東京話者の無声化は喉頭調節、および、構音運動で何らかのカテゴリカルな脱落または短縮がなされていると結論された。

5. 一般に/ki/は/ke/より無声化しやすいが、東京話者、大阪話者共に/ki/は/ke/より子音が長く母音が短かった。また声門の閉鎖と声帯振動の開始点のタイミングは/ki/が/ke/より遅いことが明らかになった。/ki/が/ke/より母音が短いことには、母音/i/の方が構音時の声道が狭いため呼気が流れにくく声帯の振動が起こりにくいためと推察された。

以上、本論文により、母音の無声化と子音、母音の発音の特徴、特に喉頭調節との関係性が明らかになった。本研究はこれまで定性的にしか示されなかった無声化の発現のメカニズムの解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。